三輪
あいり
軒端梅
行まい衣
雲林院

十八

三輪

ワキ詞 是ハ和州三輪の山陰に住居する玄賓と申沙門にて候　扨も此程いつくともなく女性一人毎日樒閼伽の水を汲て来り候　今日も来りて候はゝいかなる者そと名を尋はやと思ひ候

次第 女 三輪の山本道もなし

ひばらの奥を尋ねん　げにや老少
不定とて若きを頼むべき習ひなく
老残りきたるこそ哀れなれ
かくていつまでうき年月を
三輪の里に住居する女にて候又此山
陰に玄賓僧都とて貴き人のわたり候
程にいつも樒閼伽の水を汲みてま

いらせ候今日も又参らばやと思ひ候
ワキ　山頭には夜孤輪の月を戴き洞
口には朝一片の雲を吐く山田もる
僧都の身こそ悲しけれ秋果てて
ぬれど訪ふ人もなし　女詞　いかに此庵室
のうちへ案内申し候　ワキ詞　案内申さんと
とはいかなる人ぞ　女詞　山影門

に住人ぞわらはが住家ハ三輪の里山本近き所なり其上我庵ハ三わの山もと恋しくハとハ讀たれど何しに我をハ問給ふべき猶も不審に思召さバとぶらひきませ杉たてる門をしるしにて尋給へといひすてゝかきけすやうに失にけり

此草庵を立出て〳〵行バ程なく三輪の里近きあたりか山陰の松ハしるしもなかりけり杉村ばかり立なる神垣ハ何くなるらん〳〵

不思議や是なる杉の二本を見れバありつる女人に与へつる衣のかゝりたるぞや寄てみれバ衣の褄に金色の文字すわれり讀て見れバ哥也三の

輪は清く清きぞ唐衣くると思ふな
取ると思はじ　女「千早振神も願のある故
に人の値遇に逢ぞ嬉しき　有難や
御身なる故は　末法にも妙なる拝
みはさせ給ふや　かくは末世の
衆生の願ひをかなへ　姿をまみえ給ひ
ますと今も深き感涙に墨の衣も
を濡らすや　女「恥しながら我姿上人にま
みえ申し罪をたすけてたび給へ　いや
罪科は人間にあり　是は妙なる神道の
女「衆生済度の方便なるを　暫し迷ひの
女「人心や　女姿と三輪の神
ちはや掛帯ひきかへて　祝子が著すなる
烏帽子狩衣裳裾のうへに掛

答ふやうげにも姿は恥かしのもりて
余所にや知られなん今より後は通ふ
まじ契もこよひかぎりなりと懇に
語ればさすがにわかれの悲しさに帰る
所をしらんとてをだまきに針をつけ
裳にこれをとぢつけて跡をひかへて
したひゆくまだ青柳の糸長く

もゝや玉のちゞのかよひみの
糸くりかへし行程に此山本の神垣や
杉の下枝にとまりたりこはそもあさま
しや契りし人の姿か其糸の三わを
残りしより三輪のしるしの過し世を語
るにつきて恥しや[illegible]顔さし御相
好げよつきても法の道あるにしも

頼もしや　中にも神代の昔物語委しくい
ざやあらハし彼上人を慰めん　まづハ
岩戸の其初かくれし神を出さんとて
八百萬の神遊び是ぞ神楽の始なる
千早振　天乃岩戸を引立て
神ハ跡なく入給へバとこやミの世と
はやなりぬ　八百よろづの神達

岩戸の前にて是をなげき神楽を
奏して舞給へハ　天照太神其
時に岩戸を少しひらき給へハ又
とこ闇の雲晴て日月光りかゝやけ
バ人の面白々と見ゆる
面白やと神の御声の妙なる始め
の物語　思へハ伊勢と三輪の

引つゞく一勢かゞやかにちらすいはゝりて
行と岩倉やまの関越えて戸をおさへ
あけかたく有難き夢のつげをなせる
やくめもあるまじく

安宅

平ワキ　かやうに候者は加賀の国富樫の何某にて候
さても頼朝義経御中不和にならせ給ふにより判官殿十二人の
作り山伏となつて奥へ御下向の由
頼朝聞召及れ国々に新関を立て
山伏をかたく撰ひ申せとの御事にて候

去間此所をハ某承て山伏をとゝ
め申候今日もかたく申付ばやと存
候いかに誰かある

ツレ 御前に候

ワキ 今日も
山伏の御通りあらハ此方へ申候へ

ツレ 畏て候

次第 山伏 旅の衣ハ篠懸の旅の衣
ハすゝかけの露けき袖やしほるらん

サシ 鴻門楯破れ都の外の旅衣日も
はるゞの越路のすゑ思ひやるも遥かなる

ツレ 扨御供の人々には伊勢の
三郎駿河の次郎片岡ましほ常陸
坊 弁慶ハ先達の姿となりて 主
従以上十二人いまだなれぬ旅姿袖
のすゞかけ露霜をけふ分そめて
いつ迄の限りもいさや白雲の越路

表よいかにあり、ときしもころは
二月の〱きさらぎの十日の夜月
の都を立出て、これや此、ゆくもかへるも
わかれてハ、知も知らぬも相坂の
山かくす霞ぞ春ハうらめしき
浪路遥に行舟の、海津の浦に
着にけり、東雲早く明行ハ、浅茅
色づく愛発山、氣比の海、宮居久しき
神垣や、松のきのめ山、なを行さきに見え
たるハ杣山人のいたどり、河瀬の水の
浅生津や、末ハ三国の湊なる
蘆の篠原波よせて、靡く嵐のはげしきハ
花の安宅に着にけり
猶よ急ぎ候ほどに安宅の湊に休らひ候

此所に御休足あらふずるにて候
判官「いかに弁慶　シテ「御前に候　判「唯今の
人の申て通りつるを聞てあるか
シテ「いや何とも承らず候　判「安宅の湊に新関
を立て山伏をかたく撰と社申つれ
シテ「言語道断の事なる物かな扨は御下
向を存じて立る関と存候へハゆゝし

き御大事にて候先此傍にて皆々
談合あらふずるにて候是ハ一大事の
事にて候間皆々心中の通を申候へ
是見ん御やあらふずるにて候　ツレ「我等
心中にハ何程の事の候べき唯打破
て御通りあらうずると存候　シテ「暫く候
[illegible]此関一所打破て御通りあ

にくき我より込よりさふらひて御出
あつまるみそくりは皆修通りの之
承りは候めすよ中は山伏修道の大勢修通
里は何と山伏の修通りあるし申り
心ひそあるおふく客僧修通是ハ関所なく
候承の是ハ南都東大寺建立の為
よ国へ客僧をつかハされ候ハ陸道を

ハ此客僧つゝく修通里候ハ先初よは
入之へ手を比勝あは勧よハまいらせる
おくは去おろう是ハ山伏修道よ修つく
とめへ関なくは掛其諸ハ候御ちんは
頼朝義經は中不和よおいてを給ふようが
判官殿ハおく衛をと頼まる十二人の
作り山伏となりて御下向の由をきこし

すゝみてハ情をもて渡り　ゑり山
いでゝ家郷の勤をうしなひ文山をとい
つゐ役の優婆塞の行儀をうけ　其身
ハ不動明王の尊容をかたどり　頭巾と
いつパ五智の寶冠なり　十二因縁のひだ
をすへて戴き　九会曼荼羅の柿の
篠懸　胎蔵黒色のはゞきをはき　掛

又やつめのわらんづハ　八葉の蓮華をふ
まへたり　出入息に阿吽の二字をと
なへ　即心即仏の山ぶしを　爰にて
うちとめ給ハん事　明王の照覧はかり
かたく　熊野権現の御罰をあたらん事
立所に於て疑ひあるべからず　唵阿
毘羅吽欠と数珠さら〳〵とおしもめハ

サシ
近比殊勝ならばさきに承りつるは南都東大寺の勧進と候間定めて勧進帳の無き事はあるまじ勧進帳をあそばされ候へ是にて聴聞申さうずる

シテ
何と勧進帳をよめとや

ワキ
中へ入る

シテ
心得ては本来勧進帳はあらばこそ笈の中より往来の巻物

一巻取出し勧進帳と名付つゝ高らかにこそよみ上げけれ夫つら〳〵惟んみれば大恩教主の秋の月は涅槃の雲に隠れ生死長夜の長き夢驚かすべき人もなし爰に中比帝おはしますみ名をば聖武皇帝と名付奉り最愛の夫人に別れ恋慕やみがたく涕

泣眼よりあふるゝ涙をとゞめぬくるしさ善
塗よりかへりて重源坊を建立の猶
の霊場の絶なんとするを悲しみて俊乘坊
重源諸國を勧めたまふ一紙半銭の奉財
者は此世にては無比の楽にほこり当来にて
ては数千蓮華の上に座せん歸命稽首
敬白と天もひゞきと讀あげたり　関は

人肝をけし恐れをなして通しける
きりく急ぎひとく通りけり　承
アヽ申し〳〵判官殿の通り候
いかに是なる強力とまれとこそ
我君をあやしむるは一期の浮沈極りぬ
と皆一同に立帰る　あゝ暫くあつて力
をきらんとすれば忙てかれを強力へ通

しぬう　ワキ「あれなるハわごりよがあるくハ
シテ「それハ何とて御とめ候ふ　ワキ「あれハ強力
がちと人に似たるとや申者の候程に按留
てはよ　シテ「何と人か人に似たるとハ珎
からぬ仰あり按頭に似候ふ　ワキ「判官
殿に似たると申者の候程に落居の間
留めて候　シテ「やゝ言語道断判官殿に似

申たる強力めハ一期の思出な腹立や日
高くハ能登の国迄越さうずると思ひつる
に僅なる笈負うて後に下ればこそ人も
怪しむれ惣じて此程にくしくと
思ひつるにいで物見せてくれんとて金剛
杖をおつとつて散々に打擲す通れと
社やゝ笈に目を懸給ふハ盗人ぞうな

下セん上
かた〳〵ハ何故にかほどいやしき強力に
太刀かたなをぬき給ふハめたれ顔のふる
まひハ臆病の至りかと十一人の山伏ハ
うちかたなぬきかけていさみかゝれる
有様ハいかなる天魔鬼神も恐つべうぞみえ
たる ワキ 近比誤りて候はやく通り
候へ シテ詞 いかにあの関をハ早抜群に隔た

りて候間此所に暫くやすらひあゝ宮を
皆々近う参り候へ いかにや
今日の機転さらに凡慮にあらず天
の御加護ときこそ思へ身の果とや
誠に是は運つきはてゝ弁
慶が杖にもあたらせ給ふと思へハいよ
〳〵あさましう社候へ 判 判官ハあつくも

みきあれ唯何かゝよ千余人若の
覚ゆるらしてだりひは面を合せて
あく計なるか換りぬるよ義経ぞ
馬の家に生れきて命をまもるよりは
はと西海の浪にたゞよひ山野海岸に起
あふれまた鎧の袖枕かたしく隙
も波の上なる時は舟よりかひ無は汲よそと

住ぎなる時は山沓の蹄もみゝぬねざめの中
海をてらしある夕浪の立くる音やさぬ
明るれどかく三年の程もあく歎ちて亡し
あひく世の其思節もいうてはありさる
此身れても何と又因果ぞやうらや
あみるが叶ぬ社うき世あれとこれ
さればこそ猶思ひ入きはあはれさゆきの直

〽まふは 鳴るは瀧のみつ 鳴るは
たきの水 日は照るとも絶えずとうた
り とく〳〵立てや手束弓の 心
ゆるすな関守の人々 暇申してさらば
よとて 笈をおつ取り肩にうちかけ
虎の尾を踏み毒蛇の口を遁れたる
心地して陸奥国へぞ下りける

東北

年立帰る春なれや 花の都に
急がん 是は東国方より出たる
僧にて候 我未都を見ず候程に此
春思ひ立都に上り候 春やうつや
霞の関をけさ越て 果はありけり
武蔵野をわけ暮しつゝ跡遠き山

又此花雲上にて都の花も匂ひつゝや
梢にのとけかゝる流れく　急なる路は
見しや都に来る人ゞ見る事なる梅を
見る人ハ外を盛とみそなはす様々の事
きゝ給はずや此寺の人に尋ねやと
とかく　梅ぞ此梅ハ和泉式部と申し
うや増詠めけるやと思ふ所　あはれ

あさき成御僧哉梅を人によは尋さへも
何と教へまゐらせて候　作
人に尋て之も和泉式部と社教へ給ひ
つれ　シテ女「いやさ様にもふるひ梅の名
は好文木又ハ鶯宿梅なとこそ申へけれ
去ぬ人ハ何とても見給へるふり
此寺いまた上東門院の御時和泉式部

ましら軒端乃梅の陰よ居をしく
花も妙成法の道まよハぬ月乃夜を
すがら此御経を讀誦まうしく
女へ寔有難の御経やあらありがたの御経
やあかしことくおもひし給ふハ和泉式部よ
めかず思ひ入り聞学のうち横此寺ハまづ
上東門院の御時御堂関白此門前
を通り給ひし御車のうちにて
法華経のひゆほんをたからかに讀給
ひしを式部此門乃うちよてきゝて門
乃前法の車乃音きけバ我も火
宅をも出ぬるかなとよみし
るみれかゝる思ひ出もわすれかはや
ワキ　さてハ此寺ハ和泉式部の詠ずると

花の都ぞ雲井のよそまでものど
けき心を種として天道にかなふ詠
吟なり所ハ九重の東北乃霊
地ふかく王城の鬼門を守りつゝ悪魔を
はらふ雲水の水上ハ山陰のかも河や
ぎよ白川乃流もいさぎよき御響
も常楽の縁をあらはすや庭にハ池

水をたゝへ鳥ハ宿す池中の樹
僧ハ敲く月下の門出入人跡まれ
なりてもつねハひそかにしづまり色めく
有様ハきハまる花の都あり見佛
聞法のかずかず順逆の縁ハいやまし
に猶朝暮に懈しの九夏三伏の
あつたきて秋きたりとおもひ

人こそ変はれ花の臺に和泉式部が臥所よとて方丈の室に入ると見えし夢は覚めにけり 見し夢は覚めにけり

錦木

ワキ 雲やゆくへも遠き山 其通路を尋ねん
詞 是は諸國一見の僧にて候 我いまだ東國を見ず候程に 此度思ひ立陸奥の果までも修行せばやと思ひ候
上 [?]をめしとゆく雲の 撰一手も[?]夕暮の空もかさなる

入ざりしをバとり入ぬハ或ハ百夜三
年迄も立しよりて千束とよめり
ぞ此山陰に錦塚とて候是ハ三年迄
錦木立たりし人の古墳なれバとり
直錦木の数ともに塚に築こめて是
を錦塚と申候
ワキ問
然らバ其錦塚を
見せて故郷乃物語にし候へしるべしつゝ

シテ
語りさへあからさまなる数にやとの
上歌
こなたへ入らせ給へとて夫婦の者ハ先に
立ば旅人を伴ひつゝ　けふの細道
分暮て錦塚ハいづくぞ　かやが軒端
ぞうらぶれ松のこ門てゝ人の通路なきこそ
かくやそゝしよや道芝乃露をはらはせ
いまし真如乃月ハ行くらやもとめたく

シテ上 あら有難の御弔ひやなふ二世とかね
て契りたるもさしも三年の日数
積る此錦木のあひ難き法の値
遇の有難さよいそく姿を見え申
さんツレ上 今こそは色にも出あへみさまれ
地 三年過ぎぬいふしるの　ツレ上 愛もゆめ
は今宵三年の値遇よどうる

あはれとも 地上 尾花か本の思草乃
よりかくしあれ塚のまほろしよ顕き
出君を御弔ひきよといふあはれ秋落
の風よ入ぬれは刹利も首陀も積ら
さるまきりくあらぶうや 上 みつき
面影も古塚と見えしつるか内ハかりや
宮燈乃陰あきらかなるへ家のうちに

廿

ものと　秋乃虫の音　きけハ長きも

きりは　はたり　ちやう　ちやう　きりは

たりちやう〱きりはたりちやう〱

機、織まつ虫きり〱もつゞりさせよと

あく虫までころものゝあはれなるひそ

なのめすむ野のゞ狩れ色の細布織

てらきまを　実や陸奥のけふ乃

郡のあらひさく所からあることわざの

世またくひまさ有様の那　やつる

たよりかりあるま狩も音をあらせ

やの僧乃行よ随ひさく織細布や

錦木のゝ度百夜をふるとも此執心

いよも盡し　戀も今逢かたき縁

ようりて妙ある一乗妙典の功力を

さんと懺悔の姿夢中に移し顕さんと

クセ あはれなりし錦木をたてこへは女は

うちに細布乃織る機虫の音に立て

閨のうちあけまでたたびに内外に

あるそやへだてられ知らぬ中垣の隔てれ

戸はしさし其まゝに夜をもてに明

きれ色もこくと立帰りぬやまず猶に

思ひの数も積りきて錦木は色朽て

されば苔に埋木の人しれぬ身ぞあはれなる

かくて思ひもとまるべき様に錦木は朽

まさるもげにさ立てひとく筆て千束は数も

名をよむきぬうや恋の埋木とも此錦

木を譲しあり思ひきや榻のし

がきうきつめて百夜も同じ丸寝さん

夜遊の盃に移りて有明の影はつかし

やはつかしやあさましやあさましや覚めなば

夢人ありとおもはざりける錦木も細布

も夢も破れて松風さつさつたる

朝の原の野中の塚とぞなりに

ける

雲林院

ワキ　藤咲松も紫の雲の林を尋ねん

詞　是ハ津の国芦屋の里に

公光とや申者にて候我幼少より

伊勢物語を手に触れ寵愛仕り候

然るに或夜不思議の夢を蒙りて候ほど

只今都にと急ぎ候　花の都に

うたまくらの月を山あひに
も雅をひや言葉つきせぬ此お語り
語るをつきて松の葉のちりうせず
くまの世まちくも情あることの葉
あまれかりそめよくあへはきるいかへ
の行方あまつさへつる通夜覚る言葉を
成まきりや覚る言葉と成ますり

右之本者観世太夫織部
章句眞本令改行畢
正徳六丙申歳弥生
天保十一庚子歳孟春改正再板
皇都二条通御幸町西江入町
山本長兵衛